

Club Je Pense

2019年10月講義

実存的視点と構造的視点

実存主義とは

人間の実存を哲学の中心に置く
思想的な立場

「実存」とは？

一般的な意味では

実際に存在すること

実存主義の文脈では

独特な存在者として

自己の存在に関心を持ちつつ存在する

人間の主体的なあり方

そして

具体的状況にある人間の
有限生・不安・虚無を超越し
真に自己であろうと努力する在り方

では
哲学的な意味で

「実存的に生きる」

とは具体的にどういうことでしょうか

実存主義を代表する
哲学者2人から考えてみましょう

まず1人目は



フリードリヒ・ニーチェ
(独 1844年～1900年)

永劫回歸

ニーチェは人の生き方を

ディオニュソス的な生き方

アポロンのな生き方

とギリシヤ神話から引用しました

「アポロンの生」

君子危うきに近寄らずのような
賢く理性的な生き方は

「ディオニュソス的な生き方」

失敗を恐れずチャレンジをして
苦楽の振れ幅が大きい生き方

人は年を重ねると分別がつき
失敗を恐れて傍観者になったり
自分では行動しない評論家になったりします

人は年を重ねると分別がつき
失敗を恐れて傍観者になったり
自分では行動しない評論家になったりします

力への意志の忠実に生きていれば
幸も不幸も経験する

幸と不幸が因縁でつなぎ合い
全く同じ人生を繰り返すとしても
今ここにいる瞬間を望め

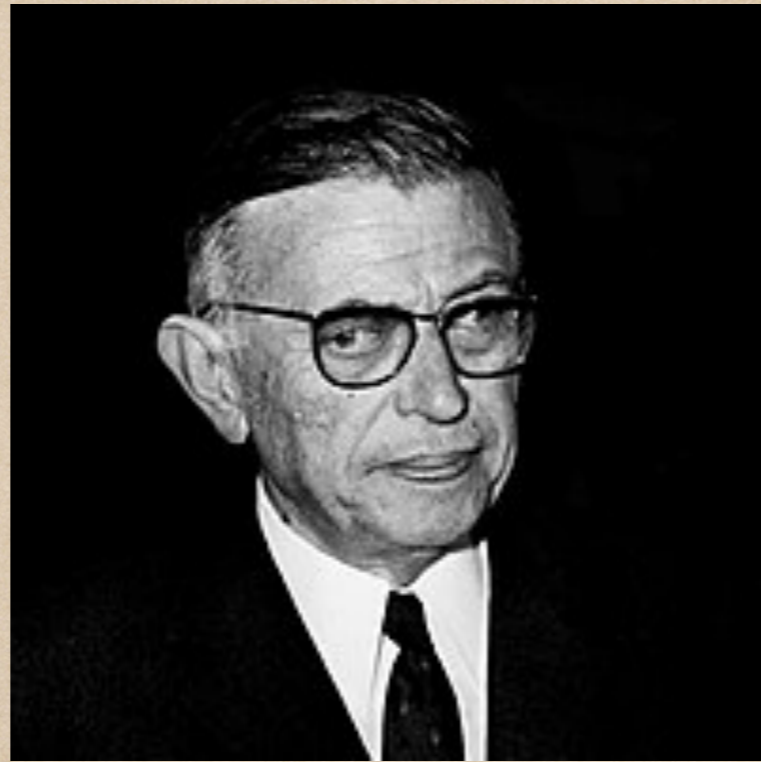
なぜなら

その方が精一杯人生を生きることになる

ただ楽しい経験だけより
苦しいことを乗り越えた経験がある方が
人生を振り返った時に
懐かしさや潤いを与える

喜びも苦しみをある
振れ幅の大きい人生こそ
愛し楽しもう

もう一人の哲学者



ジャン・ポール・サルトル
(仏 1905年～1980年)

即時存在と対自存在

即時存在とは

それがあるところのものでしかない存在

例えば

石ころや猫は自分で在り方を決められず
誕生したままの存在でしかない

対自存在とは

それが現にあるところのものではなく
それが未だないところの存在

人間は本質がなく
人生の意味や目的など
自分でいくらでも自由に決められる

あらゆる自己イメージから
自分を解き放って
自分の可能性を開いていく存在

実存は本質に先立つ

実存主義は構造主義の乗り越えられた
思想や考え方とされているが
多くの人には実存的にすら生きられていない

だから

構造的な視点を持つこともできない

では
構造主義とは

我々の在り方は
構造に規定される

構造は実存に先立つ

私はなぜそうしたのか？

ではなく

私をそうさせたのはどのような構造か？

自分に着眼するのではなく
周りから自分への影響に着眼する

例えば

「失敗するのが怖い」

「傷つくのが嫌」

構造的視点を持ってない人は

「怖いものは怖い」

「嫌なものは嫌」

で終わってしまうため

現実を変えられない

構造的視点を持つ人は

どのような構造が

「私に失敗を怖がらせるのか？」

「私に傷つくことを嫌がらせるのか？」

と自分をそう仕向ける構造に着眼する

自分を薄めて

自分の周りの環境（構造）を見ることで
解決の糸口を見つけられる

じゃあ

構造が読めればそれでOKか？

構造的に俯瞰して
実存的に熱く生きる

ご静聴ありがとうございます

ワーク

日本の社会問題を
実存的・構造的視点で考察

子育てにおける
父性の不在と母性の暴走を
どうやったら減らせるか？

実存的・構造的に考えてみましょう